むゆうげ

100号
No.1100

2013(平成25)年
1月1日

自分の番

うまれかわり
死にかわり永遠の
過去のいのちを
受けついで
いま自分の番を
生きている
それがあなたの
いのちです
それがわたしの
いのちです

みつを

相田みつを美術館
オリジナルカレンダーより頂きました

発行者:高槻市氷室町2-19-30
浄土真宗本願寺派
萬徳寺
電話(072)696-0666
FAX(072)692-0769

新春法話

生かさるるいのち尊し
けさの春

中村 久子

ひとりじゃなかった

私は、お寺の副住職として法務を手伝いながら、近くの医院に内科医として勤務しています。以前その病院でこんな事がありました。

ある六十歳の女性が外来に来ました。一目診て全身に黄疸が出ているのが分かりました。聞いてみると、二週間前から自分でも体が黄色いのに気づいたとの事。

「私の友人に二人、やはり黄疸が出て死んだ人がいました。二人とも入院して、手術したり抗ガン剤で治療したけど、結局苦しみながら死にました。多分私も同じような病気だと思います。だから私は何も治療せずに死にたいので、今まで医者にかかりませんでした。でも友達が、一度だけでも診察を受けてと執拗に言うので来ました。」と言われました。

調べてみると膵臓癌で、既にあちこちに転移していて、積極的な治療は望めそうもありませんでした。彼女は身内が無く一人暮らしでした。そこでこれから病状が悪化する事も考え、入院を勧めましたが拒否されました。

「入院しても治らないのでしょう。私は延命するだけの治療はしたくありません。それより自宅で一人で出来るだけ頑張って、誰にも迷惑をかけずに死にたいのです。どこか間違ってますか?先生」

誰も寄せ付けない様な強烈な勢いで、彼女は逆に私に迫りました。確かに治る様な病状ではなく、何の反論も出来ませんでした。ただ私には、彼女が孤独と病気に負けまいと必死に突っ張っているだけのようにも見えました。

その後は彼女の希望通り、外来で麻薬等で痛みを抑えながら自宅療養を続けました。病状は徐々に進行していきましたが、彼女は少しずつ本音を話してくれるようになりました。

「外では普通に振る舞えるのですけど、家に一人でいると一日中泣いてばかりいるので、若い時習っていたバレエをまた習い出しました。半年後に発表会があるので、それまで何とか生きていたいです」「先生に折角合えたのに、もうお別れしないといけないような状態になってしまいました。残念です」

そしてある日、外来に来た彼女は泣きじゃくりながらこう言われました。「もう食べても全部吐いてしまいます。何とかバレエの発表会までと思ったのですが、とても無理です。入院させて下さい」と。

入院した彼女は、今までの突っ張っていた気持ちがほぐれたのか、病状の悪化と相反して、とても明るく柔和な顔つきになりました。「看護師さんや皆さんが色々よくしてくれる。病院にすべてお任せして気が楽になりました」「入院してよかった。本当に有り難うございます」と感謝の言葉が出る様になりました。病院のスタッフの優しい支えが、彼女の閉ざした心を溶かし、救ってくれたのだなと思いました。

それからしばらくして彼女は亡くなりましたが、見送った夜、布団に入ってから色々な思いが浮かんできました。

天涯孤独の彼女は、病気の痛みも生きる苦悩も全て自分一人で抱え込み、どんなにか辛かった事だろう。しかしそのかたくなな心が、周りのみんなの支えの中で、〝私は一人じゃなかった。すべてもうお任せしよう〟と転換された時、彼女は心の平安を得られたのではないかと感じました。

弥陀の誓願不思議にたすけまいらせて
往生をばとぐるなりと信じて念仏申さ
んとおもいたつこころのおこるとき、
すなわち摂取不捨の利益にあずけし
めたまふなり

（『歎異抄』第一条）

仏様の救いも同じ様な事が言えるのではないでしょうか。人間はつい自分が世界の中心であるかの様な錯覚に陥り、全て自分の力で生きているが如く思いがちであります。しかし聴聞を続ける中に、そうではなかった、自分はおおいなるいのちの働きの中に生かされ、願われていたのだとふと気づかされた時、心の大転換が起こるのだと思います。その大いなるいのちの働きを、親鸞聖人は弥陀の誓願不思議とか不可思議の光明と呼ばれました。

そしてその光明に包まれている有り難さに思わずお念仏がこぼれる時、「もうあなたは救われているのですよ」とお示し下さってます。死んでからではなく、今、ここに救われていると。そこに〝ああ、私は一人じゃなかったな〟という心の安心が得られるのでありましょう。

同じことをするにも…「してあげている」と思うのと「させてもらう」と思うのでは大変な隔たりがある。み仏の教えを聞くと「させてもらう」心が育てられ、自分も他の人もともに「ありがとう」の喜びに恵まれる。「ありがとう」と言える人に不幸な人はいない。

勿論、仏になる（成仏）のは娑婆の縁尽きてからであり、凡夫の私の今の生活は何も変わりません。」しかし私を照らし包んで下さる弥陀の光明にすべておまかせし、その中で、お浄土に還るその日まで自分らしく安心して力強く生きて行けばいいのだ。そんな事を彼女の死を通して知らされた事でした。

※施本『よろこび』栗田正弘先生（宮崎県、称専寺副住職・内科医師）の文を頂戴いたしました。

平成二十五年度（二〇一三年）年回表

	（亡くなられた年）	
一周忌	平成二十四年	往生
三回忌	平成二十三年	往生
七回忌	平成十九年	往生
十三回忌	平成十三年	往生
十七回忌	平成九年	往生
二十五回忌	平成元年（昭和六十四年）	往生
三十三回忌	昭和五十六年	往生
五十回忌	昭和三十九年	往生

※亡き方を通して、今私たちは頑張って生きていますよ。とのお心をお忘れにならないようにお勤めして下さい。お家のご都合で、祥月命日が過ぎてもよろしいですよ。

萬徳寺平成二十五年度（二〇一三年）年間行事予定表

○本願寺ご正忌報恩講　一月十四日（月）
仏教壮年会団体参拝
○門徒冥加金寺勘定　一月二十七日（日）
○仏教婦人会常例法座　二月、九月
○花まつり　四月八日（月）
○永代経法座　四月十三日（土）、十四日（日）
〈講師　岸部、大光寺・清岡隆文 師〉
○顕証寺蓮如忌仏婦団体参拝　五月十一日（土）
○人生講座　六月三十日（日）
〈講師　ハーモニカ奏者　木谷悦子 師〉
○お経の練習会　八月下旬
○報恩講法座　十一月九日（土）、十日（日）
〈講師　東淀川区 瑞松寺・野村康治 師〉
○除夜会　十二月三十一日（火）

孫次男迦葉が
報恩講デビュー

世話役さまによります報恩講準備

住職のひとり言

◆二〇二三年（平成二十五年）あけましておめでとうございます。今年も新しい年を迎え、また新たな〝いのち〟を頂きました!!「共に苦しみ　共に泣き　共に喜び　共に笑うそのどこにでも　お念仏がある」。私たちもお念仏の心溢（あふ）れる日暮らしをさせていただきましょう。

◆二〇二三年新年号で〝むゆうげ一〇〇号〟を迎えることになりました。門信徒の皆さまの励ましのおかげで、二十五年間続けてこられたことに感謝の気持ちで一杯でございます。これからも寺報〝むゆうげ〟を通して、萬徳寺がより身近なお寺であり、ご法義伝達の一助になればと考えています。

個人情報により非表示にさせていただきます。

かけがえのない方々が阿弥陀さまの命に還っていかれたのです。親と子、夫と妻、それぞれのいのちといのち、心と心がふれあった確かな人生の中で、ともに生きてきたことを有り難く思います。今一番お念仏がしみとおる一時。お念仏称えながら亡き方とお遇（あ）いして下さいませ。なまんだぶ。なまんだぶ。

個人情報により非表示にさせていただきます。

初参式は、子にとっての人生の始まりの仏縁ですが、同時に親にとっても、親として生きる出発点であり、子によって与えられた尊い仏縁です。如来さまのお慈悲の中で、仏の子として明るいお子にすくすくと成長されますよう願っています。

◆昨年十一月十日・十一日に報恩講法座をにぎにぎしく勤めさせていただきました。門信徒の皆さま、遠近各地よりお参り下さいました。昨年の報恩講には孫の迦葉が出勤デビュー？してくれましたが、お内陣に座っていられず、ずっと如来さまとかくれんぼしていました。